

# 山田町の方のつぶやき

「ボラパックⅡ」では、昨年度の活動に比べて直接現地の方と接する機会が多くあります。参加者が現地で聴いた声を毎便書き留めてもらっています。その「つぶやき」をまとめた用紙をガイダンスで配布し、出発する前の心の準備の一つとして目を通してもらっていました。その中の一部をご紹介します。

大きく歩み出しますよ！  
今年が「復興元年」。

見て感じたことや聞いたことを風化することのないよう、周りの人たちに語り伝えて、いざという時に備えてほしい。

前はきれいな海だったんですよ。今はこんなになっちゃったけど。

もう失くすものは何もないから怖いものはない。

命があっただけで十分だ、あとは何もいらぬ。

物資の供給は十分にあるので不自由はないが、こうしてふれあい訪問いただけることにとても感謝している。

仮設の住民同士でイベントの計画を立てて、声を掛け合い、仮設に住む皆が動き出すためのきっかけ作りをしている。

せっかく生き残ったのだから、これからは生きなくちゃ！

何もしてくれなくても、あんた達が来てくれるだけで涙が出る程嬉しい。ありがとう。

安置所で遺体が並ぶ中、一人一人顔を見ていった時の気持ちは忘れられない。

何のお礼も出来ない事が悔しい。

自分で笑っていかないといけないね。

「てんでんこ」(てんでバラバラに) 家族を信じることを。

仮設は抽選なので近所だった人とバラバラになり、1年たってやっと隣の人と話ができるようになった。

今年の桜がいっぱい咲いてるのを見て、やっと最近笑えるようになりました。

私は家も残っているし、家族も何ともないので被災した人たちに何とも言えない気持ち。

1年たって、かなしみは少なくならないね。

70歳以上の人は皆、仮設での死ぬのを待つだけ。

震災をきっかけに、疎遠になっていた孫と電話する機会が増えて嬉しいこともあった。

地震で亡くなった場合、遺体はひどくても残っているけど、津波の場合は遺体がどこかに行ってしまう、遺族が辛い思いをする。

皆が『東北の人は強いから』と言うけど、そうするしかない。元気なふりしてるんだよ。

自分たちは多くの人に支えられているけど、ボランティアさんは遠い道のりをかけて来てくれて、ご苦労様です。

ありがとう、またね。

自分の命を守るのは、難しいようでも簡単。

震災直後は状況に慣れてしまい、平気で遺体をまたぎ、その前でご飯を食べられるようになった。

私はポジティブに生きる。震災後、さらにその気持ちが強くなった。

荷物をとりに帰ってはだめ、戻ったら助からない。逃げること。車に乗って逃げてはだめ、車を捨てて逃げる勇気をもつこと。

福島原発も他の地域の人のため。それなのに被害を受けたのは東北の人々。何も悪いことしてないのに…。

もし必ず三重県つけかれば

この腕時計は、息子の形見で手放せない。いつもはめてる。

津波では残った家が、火事で全部燃えてしまった。探しても何も残ってない。

1人暮らしなので、皆が集まって賑やかになるとうれしい。

災害にあった場合、どうしても自分主体になる。助け合う心をもっていても行動が伴わない。

ガレキ・ガレキと一言で片付けるけど、一人ひとりの家の物、財産ですよ！

自分の所に住み続けたくても怖くて住めない。でもここがいい。

頑張れと言うが、私には何を頑張ればよいのか解らない。長い間頑張って築きあげた財産の全てを一瞬の津波で失った。今迄の人生、精一杯頑張った結果がこれだよ。この上、何を頑張れば良いのか教えてほしい。

ぜんぶ何もかもなくなるって、想像できる？

# 山田町からの声



山田町社協  
復興支え愛センター  
センター長  
社会福祉法人  
山田町社会福祉協議会  
事務局長  
福土 豊さん

あの日から1年10ヶ月、今年こそ安寧な日々が送られん事を願うものではあるが、住民からのニーズは絶えることなく、復興ボランティアの受け入れを行う日々が続いています。現在、町は瓦礫も殆どなくなり、至る所に仮設店舗が立ち並び、賑わいが戻ってきたかのように思われますが、交通手段のない世帯、高齢者などは、不自由な生活を余儀なくされています。町の基幹産業は水産業で、特に生食用の殻付カキは本町の特産品として高い評価を受けていますが、震災の破壊的被害による町の経済への影響は計り知れません。早期の復興を願わずにいらませんが、漁業が、そして漁業者の方々が元気でないと町に活気が戻ってこないと信じて疑いません。

被災者支援に特化した状況の中、ボランティア活動を通じて、崩壊したコミュニティを再構築し本来の地域福祉を繋げていくことに進むべき道を見出しました。これまで全国から2万8千人余りのボランティアさんの支援を頂きました。特に「みえの皆様」の笑顔や元気から生きる勇気と力を頂きました。皆様とお会いできたこと、そしてお話できたことが生き長らえている証と捉えて頂ければ幸いです。最後に、この震災で感じたことを付け加えさせていただきます。

- 1 自分の命は、自分で守る
- 2 ボランティア受け入れには、判断力、決断力を持った強いリーダーが必要である



ほっとサポート  
センター 山田  
竹内 美奈子さん

ほっとサポートセンター山田が開設してから、どのような交流支援を行っていけば良いのか模索していた頃、みえボラの活動と出会いました。参加者同士で楽しそうにお話しをされながら作品を作っていました。一時でもあの恐ろしい体験を忘れられる時間が必要なんだと感じました。参加されている方も「このような時間は無心になれるよ」と話されていました。みえボラには色々な活動があり、皆さんとても素敵な表情で参加されているので本当に感謝しています。いつも楽しい活動をありがとうございます。そして、皆さんに笑顔をありがとうございます。



街かどギャラリー  
スタッフ  
鈴木 聖一さん

みえボラさんが来て下さると聞いただけで元気が出てワクワクします。様々なジャンルの方々が山田の応援に来て下さり感謝致しております。私達が今まで見た事もなかった連鶴や、学生さんの楽しいアルバムカフェなど、参加した皆さん、子供達が足取り軽く帰って行きます。又参加できなかった方も経験できるよう残った材料をくださり、温かい心づかいに何時も頭が下がります。三重県あげて山田へのご支援ありがとうございます。



嶋田鉦泉(株)  
芳賀 美恵子さん

震災から1年10ヶ月がすぎました。今だに、あの時の恐怖残っていて地震が来るたび怖いです。三重のボランティアの方々は、昨年4月～当嶋田鉦泉に宿泊して頂いております。10何時間もかけ、いろいろな支援に来て頂き有り難く思っております。物作りから始め大正琴のコンサート、ハンドマッサージ e t c. 私達もいろいろな事を体験させて頂きました。娘も2人出来ました。これからも宿泊の際には山田町の三重ボラのスタッフと連携をとり協力していきたいと思っております。

## 山田町社協復興支え愛センターの皆さん

住民に合った物作りやハンドマッサージ、集まった声を拾って新しいことを提案してくれるので、住民の意欲を高めてくれるように感じます。昨年の活動により保育園の子供達もオレンジピブスを覚えていて、みえボラの活動を待っています。また、住民からみえボラへのニーズが上がってくるので、山田町に「みえボラ」さんが浸透していることが伝わってきます。

昨年からの信頼関係もできているので、気軽にこちらのニーズもお願いできたり、融通を利かせて対応してもらえて有難く思っています。

送迎ではノリがよく圧倒される時もありましたが、賑やかで運転していて楽しかったです。若い人は盛り上げ上手で、年配の人はしっかりとっていて、いろいろな話が出来ました。(沼崎さん)



何度も来てくれる方と顔なじみになり、とてもありがたく思っています。時間が空いたとき、絵本の読み聞かせを見せてもらい感動しました。(佐藤さん)

## 山田第五仮設団地区長 亀山 保之さん



山田を想って長い時間バスに乗って来てくれてご苦労様です。何度も仮設を訪ねてもらって、三重の皆さんと山田の人々の人情や気質が似ているように感じ、他所の人が来ているように思えません。みえボラのような息長いぬくもりの支援はなかなか出来ないう。気持ちがしっかりと伝わって来ます。大変だけど、これからも続けて頂けたら嬉しく思います。いつもありがとうございます。